

世阿弥と奈良

松岡心平

六十一歳の世阿弥が、次男元能に与えた能製作のマニユアル本『三道』（応永三十年）には、当時好評で、世阿弥自身も新作の手法として推奨する曲が二十九ほどあげられている。

八幡（弓八幡）、相生（高砂）、養老、老松、塩釜（融）、蟻通、箱崎、鶺鴒、盲打、静（吉野静か二人静）、松風村雨（松風）、百万、浮舟、檜垣の女（檜垣）、小町（卒都婆小町）、通盛、薩摩守（忠度）、実盛、頼政、清経、敦盛、丹後物狂、自然居士、高野（高野物狂）、逢坂（逢坂物狂）、恋重荷、佐野の船橋（船橋）、四位の少将（通小町）、泰山もく（泰山府君）

世阿弥のオリジナルを中心とするこれらの諸曲を通覧して気づくことは、二十九曲のうち、一つとして奈良盆地を主舞台とする曲がないことである。

もちろん近い曲はある。井阿弥作の「静」

は、「吉野静」にせよ「二人静」にせよ、吉野に取材しており、吉野はいちおう大和国ではある。しかし、そこは大和猿楽が本拠を置く奈良盆地とは別世界といわべきだろう。

世阿弥の改作曲「百万」も、奈良の女曲舞が主人公で、ハクセVでは、奈良から京都への道行が舞われる。けれども、彼女は嵯峨清涼寺の大念仏の場で舞っているのであり、主舞台は明らかに京都である。

二十九曲のうち奈良をかすめるのはこの二曲だけであり、「盲打」は内容不明なので不問、世阿弥のオリジナル曲では、全く奈良に取材する曲が見あたらない。

もっともこの傾向は、世阿弥以前の古曲を謡い物までふくめて眺めてみても、認めうるものである。

明らかに奈良に取材した曲としては、足利義満がその詞章にクレームをつけた「初瀬の女申楽」（『申楽談儀』）が挙げられるくらいである。世阿弥自筆本が残る古曲「雲林院」

もいちおう奈良物に分類できる。業平が二条后をかくまった武蔵塚がじつは奈良の春日野にあったとする『伊勢物語』解釈をふまえているからである。しかし、それは解釈上の主張であって、古曲「雲林院」全体に奈良のイメージがあふれているとはいえない。謡い物では、観阿弥作詞の「布留」や観阿弥作曲の「上宮太子曲舞」などが挙げられるが、古曲全体を通じても奈良関係の曲の少なさが方が目立つ。

こうした状況を大きく打ち破ったのが、六十代の世阿弥であった。

世阿弥は六十を過ぎてから、「井筒」「野守」「当麻」など、奈良を舞台とする名曲をつぎつぎに書くのである。

『三道』には見えず「申楽談儀」「五音」に見える「井筒」、「五音」のみに見える「野守」「当麻」は、いずれも世阿弥六十歳代の作品と見なしてよい。

橋の会で復曲した「布留」もこのラインにあり、こちらは世阿弥の製作年時がはっきりとわかって貴重である。世阿弥自筆本の奥書から「布留」は応永三十四年、世阿弥六十五歳の時の作であることがわかる。

世阿弥は、このほかにも「飛火」という謡い物を作っている（『五音』）。この謡が組み込まれる能「采女」も世阿弥作の可能性が強

い。また、長谷寺を舞台に、「六代ノ歌」という長大な謡物を製作したりもしている（『申楽談儀』『五音』）。

こうした世阿弥六十代の作能傾向をうけて、長男元雅が「重衡」を書き、女婿禪竹が「玉葛」「竜田」「佐保山」などを書き、「葛城」「三輪」「春日竜神」「三山」といった奈良物もつぎつぎに書かれていったのだらう。

それにしても、世阿弥は、ふるさと奈良をどのように意識していたのだらうか。

世阿弥は十歳頃までは奈良で過ごし、十二歳の時の今熊野猿楽のあたりから京都へ本拠を移し、そのまま都の人間として成長していった。

このような経歴をもつ世阿弥にとって、少なくとも青・壮年期までは、ふるさと奈良は愛憎半ばする場所であつたのではないか。

たとえば、彼は『申楽談儀』で奈良風を代表する金春権守、金剛権守などの芸を「田舎の風体」ときめつけ、とくに金春権守の芸を酷評している。その気持ちの底には、かなりはつきりと近親憎悪の感情を読むことができる。

幼児期をそこで過ごしたがゆえに、自分の中に抜きがたく存在する奈良的、田舎的な要素。都の人間となり、都でみやびな幽玄風を

めざせばめざすほど、自分の中の奈良的要素がうとましく思われ、それを体現する芸人たちを必要以上に批判してしまう、そういった心理のメカニズムは世阿弥にも働いていたと思われる。

もっとも『申楽談儀』は、六十代の世阿弥の言葉の記録だから、世阿弥は六十過ぎてても奈良に対してアンビバレントな気持ちを抱いていたことになるが、一方で、六十代の彼は明らかに奈良にかえっている。

六十歳で出家したのも、京都ではなく、奈良の補巖寺であつたし、なにより彼の奈良物の名作群がそれを証しているよう。

ことに「当麻」では、古代を孕む奈良というトポスの不思議な時間の堆積が、ある種のエロスと化して能を下支えしたましており、それはまた世阿弥にとつても足元の文化の新鮮な発見であつたにちがいない。

ともあれ、奈良への回帰の問題は、翁や鬼への回帰、あるいは「却来」思想とも関連させて理解しなければならず、稿をあらためて述べたいが、一つだけ言っておくと、佐渡に流された世阿弥が七十四歳で書いた『金鳥書』では、奈良は都とはつきり区別されて「故郷」と呼ばれ、その故郷に世阿弥が激しく呼びかける一節があることはとくに注目すべきことと思われる。

（東京大学助教授）